

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

価値的・態度的側面のみならず、知識的側面や技能的側面に関する指導がバランスよく行われ、実践力・行動力の育成につながっている事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

宮崎県都城市

○学校名

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校

○学校のURL

<http://cms.miyazaki-c.ed.jp/center08/>

2. 学校紹介

○学級数

【普通科】 15学級 【理数科】 6学級
【高校合計】 21学級 【附属中学校】 3学級

○児童生徒数

【全生徒数】 938人
【高校生徒数】 819人(平成25年11月27日現在)
(高校内訳：1学年283人、2学年276人、3学年260人)
【中学生徒数】 119人(平成25年11月27日現在)
(中学内訳：1学年40人、2学年40人、3学年39人)

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

- 1 教育基本法の理念のもとに、宮崎県教育基本方針及び宮崎県人権教育基本方針に則り、知・徳・体の調和のとれた人間の育成を目指す。
- 2 校訓「真理を求め正義を愛し、強く正しく明るい人となれ」「個性を伸ばし人格を尊び、他に対して寛容な人となれ」「理念を高く責任を重んじ、常に実行力のある人となれ」を具現化し、21世紀を担う人材の育成を目指す。

【本校の人権教育の目標】

宮崎県人権教育基本方針に基づき、各教科・領域等の特質に応じ人間尊重教育の充実に努めると共に職員の研修の機会を持ち、人権教育への理解と実践に努める。

○人権教育にかかる取組の全体概要

- 学年ごとに各学期に1回(3学年のみ1学期に3回)、人権教育に関するHR活動の時間を設定し、在学する3年間を通して、発達段階に即した継続的な取組を行う。
- 生徒の主体的な活動を促すために、1学年においてはピア・サポート研修を行い、参加体験型の指導を実践している。
- ピア・サポート活動においては、生徒は毎回ふりかえりの時間が設定されており、ふりかえりシートに記入されている内容によって、職員は実施内容の分析ができる。
- 学校行事などを通して家庭・地域社会との連携を深め、校種間連携では都城市内の普通科系高校と野球定期戦を行い、互いの健闘をたたえる教育的指導を行っている。

3. 特色ある実践事例の内容

◆ ピア・サポート活動を取り入れた人権教育の取組

(取組のねらい・目的)

・ピア・サポート活動を取り入れた当初の目的は、生徒どうしの相談支援活動の核となる人材を育成しようというものであった。ある調査で、高校生が自分の悩みを相談するとしたら誰に相談するかという質問に、80%以上の高校生が友人に相談すると答えたそうである。だとしたら、相談された高校生が適切な対応ができれば、相談した人は気持ちが楽になり、相談された高校生は人の役に立てたという気持ちになり、ウィンウィンの関係が形成される、というピア・サポートの理念に共感したからであった。

(取組を始めたきっかけ)

・本校がピア・サポート活動の取組を始めたのは、平成24年度に宮崎県教育委員会から「高校生による人権感覚あふれる人づくり推進事業」に係るグッドパートナーシップ推進校の指定を受けたことをきっかけとする。

(取組内容)

・当初は、担当者がピア・サポートについてよく知らなかったので、前年度の指定校の実践を手本として計画・実践を行った。そしてこの年のピア・サポート活動の目的は、上述したように、生徒どうしの相談支援活動の核となる人材を育成することであった。1・2学年の生徒に募集をかけて、最終的に13人(男子2人、女子11人)の生徒が集まってくれた。自ら希望した生徒だけに、相談等支援活動に対する意識の高い生徒が集まってくれた。この13人の生徒を対象とした研修を夏季課外や冬季課外の時期を使用して行った。昨年度の研修内容は、以下の通りである。

- 第1回 ピア・サポート活動についての理解、参加についての動機、仲間づくり
- 第2回 自己理解(エゴグラムへの取り組み)
- 第3回 傾聴①(FELORモデルの紹介・実践)
- 第4回 傾聴②(オウム返し、気持ちを聞き取る)
- 第5回 外部講師によるピア・サポート研修(シャンティプレマ代表 外山與子 氏)
- 第6回 相談活動①(紙上相談)
- 第7回 相談活動②(問題を解決する5つのステップ)



【第6回の研修風景①】



【第6回の研修風景②】

(取組の主体や実施体制)

・本校の場合、定例の人権教育委員会があり、この委員会が中心となって本校の人権教育や教育相談活動等の推進に取り組んでいたため、この事業の推進についても担当することになった。ちなみにこの委員会のメンバーは、教頭を筆頭に高校・中学校の教諭及び養護教諭の計10名で構成されている。そして通常のピア・サポート研修はこの委員会のメンバーが、回ごとにメイン1名、サブ2名の計3名が1つのチームを形成し実施した。

(取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫)

・本校では、昨年度7回のピア・サポート研修を行った。生徒の反応も良好であった。

〈ピア・サポート研修を受講した生徒の感想〉

・全ての研修を受講してみて、最初の頃と比べて人の話をもっと詳しく聞けるようになったと思います。毎回様々な観点から勉強して、最終的には学習したことを生かして実際に相談を受け、とてもいい経験になったと思います。相談を受けたときは、いきなり解決策につなげるのではなくて、質問から始めるようにしたいです。(高1女子)

・人の話をよく聴くということは、基本的なことだけれど、これができないとすごく困ることだということを改めて考えさせられたいい機会だった。自分でもいろいろ勉強してこれから人の悩みを聴いたりしていきたいです。(高2男子)

しかし、幾つかの課題が浮上してきた。その中心となる課題は、7回だけの研修で生徒が相談支援活動を行うことは、とても心もとない印象を受けることであった。生徒がよかれと思って行った行為が、思わぬ方向に発展したりしないだろうかという不安が生じた。また、職員や生徒の負担などの面から、研修時間をこれ以上増やすことも難しいと思われた。

そこで、本年度よりピア・サポート活動の目的を見直し、すべての生徒にピア・サポート研修を行い、すべての生徒がピア・サポーターとなり、友人が困ったときにスムーズに対応できる人材を育てることに変更した。時間の確保は「総合的な学習の時間(以下、総学)」の一部を使用し、不足する部分は人権教育のLHRの時間を充て、1学年のすべての生徒を対象にピア・サポート研修を行った。

4. 実践事例の実績、実施による効果

(取組の実績)

・本年度のピア・サポート研修は、1学年のすべての生徒を対象に、以下の内容で実施した。

第1回(4/11) 仲間づくり(エクササイズ:「こんな私です」)

第2回(4/23) 総学①(自己理解〈エゴグラムへの取り組み〉)

第3回(5/7) 総学②(傾聴〈聴く練習:FELORの紹介・実践〉)

第4回(5/14) 総学③(相談活動〈紙上相談〉)

第5回(6/12) アサーショントレーニング

第6回(9/12) 外部講師によるピア・サポート研修

(みやざき中央支援学校 指導教諭 足立明彦 氏)

第7回(2/13) 外部講師によるピア・サポート研修(UMKアサナ 柳田哲志 氏)

(取組が効果を上げた実際の事例)

・数値化できる内容ではないのではっきりしたことは言えないが、上述の取組が効果をもたらしたと考えられるものを幾つか掲げてみたい。一つ目は、総学の充実に役立っていると思われることである。キャリア教育の推進において、中心となる目的が基礎的・汎用的能力(「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」)の育成であるが、この考え方はピア・サポートの理念と類似している。よって、ピア・サポート研修を実施することは、生徒の基礎的・汎用的能力の育成に貢献しているのではないだろうか。二つ目は、生徒どうしの良好な人間関係形成に実際のところ役立っているのではないかと思われることである。現在の本校の1学年では、相談室登校をしている生徒はいるが、完全な不登校生徒はおらず、その生徒も友人の支援により、改善の兆しが見え始めていること等が根拠としてあげられる。三つ目は、職員のスキル・アップに役立っていると思われることである。本校では、総学の指導は副担任が行う。本年度、ピア・サポート活動を実施するために事前打合せ会を開いたが、そこで初めてピア・サポートのことを具体的に知ったという職員もいたため、このような取組を重ねることで、職員間に浸透させることができるのではないだろうか。

(取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項)

・昨年度のピア・サポート研修は、自ら希望した13人の生徒を対象として行った。自ら希望して参加しただけあってモチベーションが高く、どの研修にも意欲的に取り組んだ。しかし、本年度はクラス単位での実施となったので、クラスの中には意欲的ではない生徒がいたり、13人の場合にはうまくいったエクササイズが、約40人になると難しい場合があった。来年度は、その点を考慮して有効な研修になるように実施内容の見直しを行う予定である。

5. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びそう評価する理由)

・現在本校でも、新しい環境になかなか適応できなかつたり、友人との良好な人間関係をなかなか築けない生徒が存在し、漸増傾向にあるように思われる。特に1学年は中学校から高校への移行によって環境が激変するので、その傾向が顕著にあらわれる学年である。生徒の中には、環境の変化や良好な人間関係を築けないことが不登校へ発展する場合もあり、昔と違って学校としても何らかの対策を講じる必要があるのではないだろうか。そのような意味で、ピア・サポート活動は、やり方次第では有効なのではないかと思われる。

(保護者や地域住民からの反応)

・残念ながら、本校でピア・サポート活動を行っていることについての情報発信をしていないので、保護者や地域住民からの反応はわからない。担当者が基本的な枠組みづくりに追われ、そこまで余裕のなかったことが理由であるが、来年度より、情報発信に取り組んでいきたいと考えている。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

・学校にはいろいろな立場や考え方の職員がいるので、意思統一を図ることは難しい。特に最近では、教育現場でも、数字ではっきりとした成果があらわれない取組については縮小傾向にあることが一つの課題ではないかと感じている。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校

この事例には特色が二つある。第一点目は、効果的な学習教材の選定・開発が実施されていることである。本事例では、高校1年生に対して年6回の「ピア・サポート研修」を実施している。内容としては仲間づくりのエクササイズ、エゴグラムによる自己理解、傾聴、相談活動、アサーショントレーニングなどである。本事例は人権感覚の育成にかかわる指導や「体験」を取り入れた指導を工夫する際に参考となる。第二点目は、人権教育とキャリア教育を関連させて指導していることである。人権教育のために実施したピア・サポートの理念がキャリア教育の基礎的・汎用的能力の育成にも貢献し得ることを示唆している。これまでの高等学校でのキャリア教育の取り組みを人権教育の推進と対応させて進める契機となる事例である。